



特集

いかにして“本の街”はできたのか。
するつとおさらい！ 神保町の駆け足150年
なるほど神保町！文化・エンタメよもやま話

神保町が好きだ！

2019
第13号

ご挨拶

江戸時代、旗本の「神保長治」の屋敷があったことから名づけられた神田神保町。本の街として、日本のみならず海外にもその名は知られています。大型の新书店や世界一の軒数を誇る古書店、多くの出版社や編集制作会社もある、〴〵知の集積地です。

加えてカレー・喫茶・和食・中華・洋食など、古くからの老舗店からニューウェーブの店まで、神保町は魅力ある一大グルメタウンでもあります。少し足を延ばせばお茶の水は音楽と楽器の街、小川町はスポーツの街、そして昔も今も学生街であることに変わりはありません。

今号の特集では、そんな新しい街・神保町の歴史を紐解き、主に明治以降の150年の歩みにスポットを当てました。誌面の都合でかなりの駆け足ですが、魅力ある街・神保町の一端を秘蔵写真でご理解いただけるものと思います。

さあ、皆さんの好奇心を刺激する「神保町 今昔ものがたり」へタイムスリップ！

本の街・神保町を元気にする会

神保町が好きだ！ ⑬ 目次

【特集】いかにして本の街はできたのか。

〈第1部〉

するつとおさらい！

神保町の駆け足150年…………… 1

江戸時代、神保町界隈は辻斬りや仇討ちが横行／明治時代は4つの街に／護持院ヶ原に作られた東京大学／学生街の発展とモダンな様相／学生街の形成は古書店と新书店の誕生へ／明治・大正と2度の大火に見舞われた後の復活劇／路面電車で各地から人が来る／カフェー街「新天地」のネオンとジャズ／中国人留学生在が闊歩したチャイナタウン／空襲から奇跡的に焼失を免れた古書店街

〈第2部〉

なるほど神保町！

文化・エンタメよもやま話…………… 23

夏目漱石作品の神保町の〴〵原風景／芥川が谷崎を誘って、カフェーで暇つぶし!?／映画館も花盛り、文化の香り高き神保町／画一化していく学生街。ターミナル駅街と変わらない!?／昭和から平成の30年を経て、令和の時代も「やるぞ！神保町！」

いかにして、本の街はできたのか

するっとおさらい！

神保町の駆け足150年

【第1部】

江戸時代、神保町界隈は辻斬りや
仇討ちが横行する土地だった

本の街・神田神保町は、書店街として形成されてから一世紀以上の歴史があります。今から113年前の1906（明治39）年には、既に106軒の書店がひしめいていました。

さて、そこからさらに遡って、江戸時代にタイムスリップしてみましよう。当時、神田地域は東側に町人地、西側に武家地という二面性があり、とくに神田神保町から神田錦町

辺りにかけての一带は「護持院ヶ原」と呼ばれていました。

護持院とは將軍家の祈願・祈祷を

勤めた真言宗

寺院のことで、

1717（享

保2）年に火

事で焼失し、

以後、護国寺

（現・文京区）

に移転し、そ

の跡地が防火

のための広大

な火除け地に



▲テレビや映画のロケに使われる「神田猿樂町町会詰所」。

▲神田錦町三丁目「錦三会児童遊園」にひっそりと立つ「ごじいんがはら跡」の碑。

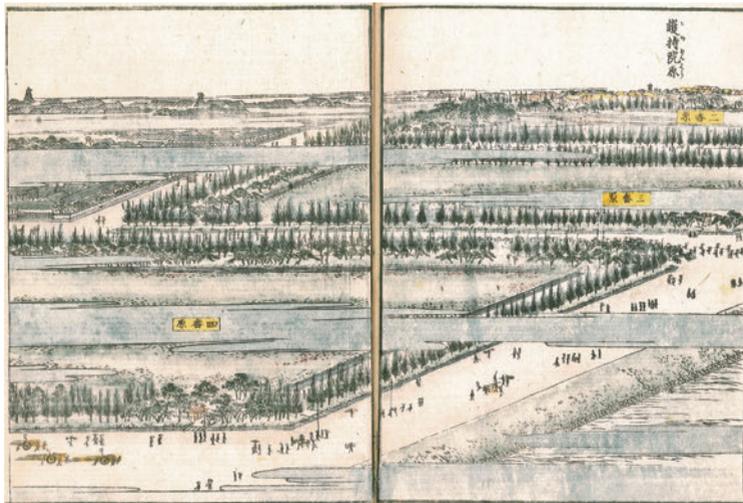




尾張屋版切絵図 文久3年（1863年）

▲おびたしい数の武家屋敷の中に、「神保」と「神保小路」という名前が見て取れる。「亀井吉十郎」は三省堂書店の創業一族。

▶天保年間頃の護持院ヶ原。現在の神保町から錦町辺り。



院ヶ原という土地があったというのも不思議な気がします。

このような地域周辺の武家屋敷には、元禄年間（1688〜1704）に、現在のさくら通り（救世軍本部の横）沿いに神保長治という旗本の屋敷があり、その前の通りが「神保小路」と呼ばれていたことから、明治に入り「表・裏・南・北」が頭に付いた「神保町」という地域が誕生しました。

ちなみに一ツ橋はさらに歴史が古く、徳川家康が江戸入府の頃、平川（現在の日本橋川）に架けられた橋の名称

に由来するものです。

明治時代は、 4つの街に分かれていた神保町

江戸期の武家地には、地域の俗称
(小川町・駿河台など) はあって



▲明治36年頃の地図では、「表神保町」「裏神保町」「南神保町」「北神保町」の町名や古書店名がわかる。

も、町人地ではないので町名はついていませんでした。1871(明治4)年に大区小区制が敷かれ、神保町辺りは「第四大区一、二小区」となり、町名も付けられました。さらに1878(明治11)年11月に大区小区制が廃止され、「東京府神田区」が誕生し、神保町地域もその一部となりました。

現在、神保町(町名としては「神田神保町」)は1つですが、かつては「表神保町」(現・神田小川町三丁目や三井ビルディングの地域)、「裏神保町」(現在のすずらん通りと靖国通りに挟まれた地域)、「南神保町」(現在のさくら通りと靖国通りに挟まれた地域)、「北神保町」(現在の靖国通りの北側の地域)の4つが



▲南神保町にあった旧・伊東玄朴(蘭方医・幕府奥医師)の屋敷を借りて、原胤昭が1897(明治30)年に私営で開設した「東京出獄人保護所」。1903(明治36)年度の市区改正事業により道路が拡幅され、この屋敷は取り壊された。(『出獄人保護』原胤昭著)



所護保町保神 家階三造養生先朴支東伊

あり、これらに「仲猿楽町」「猿楽町」「今川小路」「一ツ橋通町」を加えた

大まかな範囲が神田神保町です。

護持院ヶ原に作られたもの、
それは東京大学だった！

近代国家になるために、明治政府は教育を重視したので学校の建設を進めました。この一帯は江戸時代の武家屋敷や火除け地などの広い土地が多かったため、明治10年代には、多くの学校が設立され（最初は官立学校）、周辺には学生相手の下宿屋が建ち並びました。

今でもその息吹を感じられるのが神保町のランドマーク的存在でもある学士会館です。この一帯は江戸時代後期、護持院ヶ原の一部でした。

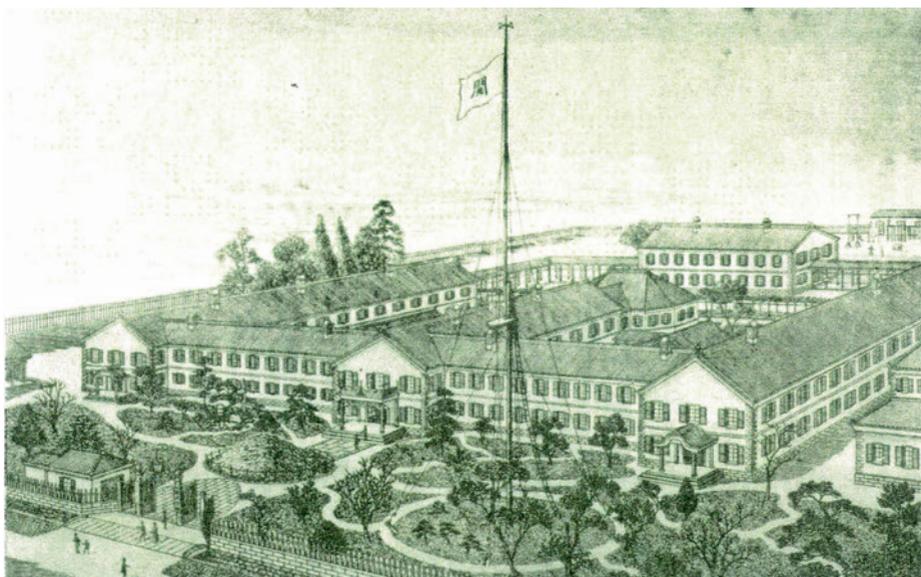
もともと洋学研究と教育のために、1856（安政3）年に発足した江戸幕府直轄の教育機関「ばんしょくさく蕃書調所」が移転されたのがきっかけでした。この時期、洋学は国家の急を要する教育的課題となり、そのために

大きな施設が必要だったのです。

この施設が母体となって「開成所」「南校」と名称を変え、明治維新後この学士会館の場所に「開成学校」が作られて、1877（明治10）年、東京大学の3学部（法学・理学・文学）が誕生したのです。しかしこの地にあった期間は短く、1885（明治18）年までに本郷へ移転しました。

学士会館の敷地内には「東京大学発祥の地」の記念碑があり、「我が国の大学発祥地」と高らかに謳われています。ぜひ、足を運んでご覧になってください。

そして、この明治10年



▲1869（明治2）年1月、現在の学士会館の場所に東京大学の母体となる開成学校が開校した。

◀◀学士会館には、1991（平成3）年に建立された「東京大学発祥の地」記念碑のほかに、日本に初めて野球を伝えたホーレス・ウィルソンの野球殿堂入りを記念して、2003（平成15）年に「日本野球発祥の地」のモニュメントが作られた。



代は東京大学の誕生をきっかけにして、いくつかの官立学校と私立学校が設立され、ここに名だたる「神田の学生街」が誕生しました。
1880（明治13）年、神田駿河台に東京法学社（法政大学）開校。
京橋区木挽町に専修学校（専修大学）開校（5年後に今の神田神保町

学）が移転。1889（明治22）年、日本法律学校（日本大学）開校、というように。
また明治時代になると、新政府の高官や京都から東上してきた公家たちが住むようになり、その土地が払い下げられて、神保町は大学や下宿屋が建ち並ぶ街になりました。

三丁目に移転）。
1885（明治18）年、神田錦町二丁目に英吉利法律学校（中央大学）開校。1886（明治19）年、共立女子職業学校（共立女子学園）開校。同年、有楽町から駿河台に明治法律学校（創立は1881（明治14）年、明治大

一方、高台にある駿河台は官僚、三菱財閥二代目社長・岩崎弥之助、元老・西園寺公望らが住む高級住宅街でした。これらの要因が重なり合っ
て、学生たちが教科書や参考書を売り買ひしたり、高官たちが得意客になることによって、現在の古書店街を形成する端緒となったのです。

学生街の発展と共に、
街もモダンな様相を呈してきた

明治時代、大学などの教育機関のほかには、**勸工場**（現在の百貨店）、貸席（集会や演説会のための施設。会合や食事のために料金をとって貸す部屋）、旅館、映画館、カフェー、病院などの様々な施設が神保町に建ち並びました。

勸工場は、明治30年代頃には東京だけで20ヶ所以上が建設され、神保町界限にも数多くありました。勸工場には生活用品・文具・衣服などの



▲南明館は、音楽隊やダンサーによる公演があって、多くの人々が娯楽を楽しんだ。

商品が並び、また楽隊やダンサーによる演奏も行われて、人々の購買意欲を誘いました。

【**洽集館**】（表神保町1番地）

1882（明治15）年開業。煉瓦造りの大型施設でしたが、10年後の

神田の大火により焼失。その後、新築しましたが新たに開業した東明館との競合に敗れて、経営者が変わり南明館と改称しました。

【**南明館**】（表神保町1番地）

洽集館焼失後、新館を建設しまし



▲明治25年7月に開業した総煉瓦造りの東名館。風格のある華やかな勤工場であった。

たが奮わず、経営者が変わって1899（明治32）年に新装開店。音楽隊やダンサーによる公演があり、「一度館内に入れば装飾品は勿論、家具に至る迄」何でも揃ったといえます。1919（大正8）年に廃業。建物の半分は取り壊されて貸席となったあと、南明座（映画館）として再スタートしました。

【東明館】（裏神保町1番地）
1892（明治25）年、浴集館が焼失したあと、「衆庶の利便を失はむことを恐れて」今の駿河台下に開業。煉瓦造りで、出店数80店を誇る陳列商品の多さでほかの勤工場を圧倒しました。

神保町を代表するビヤホール「ランチョン」は、この東

明館の一角に店を開いたのが始まりといわれています。

学生街の形成は、古書店と新刊書店の誕生へ

先にも述べましたが、大学や専門学校が開校すると、教科書を買いたいする商売が成り立ちます。現在の神田神保町二丁目には、法学専門誌『ジュリスト』や六法全書で名高い出版社・有斐閣があります。創業者は、武蔵国忍藩（現在の行田市）の武士でしたが、江戸幕府が瓦解して芝の本屋で修業をし、その後神保町で1877（明治10）年に古本商「有史閣」として創業。ほどなく法律書の出版社になりました。

そのほかにも、現在も神保町を代表する有名書店や出版社のいくつかは、今と同じ場所で創業しました。

書店や古書店では、1881（明治14）年、三省堂書店と中西屋書店

(丸善) 開業。1886 (明治19) 年、富山房開業。1890 (明治23) 年、東京堂書店開業。1903 (明治36) 年、新潟県長岡市で開業した一誠堂書店が、3年後の1906 (明治39) 年に神保町に移転。当時は、古書店と新刊書店がはっきり区別されていませんでした。三省堂



▲1917 (大正6) 年頃の岩波書店。右隅に「漱石全集刊行會」との表示があり、夏目漱石との関係の深さがうかがえる。

書店の創業者は、今の明治大学の場所に屋敷があった亀井家 (2頁上図参照) でしたが、大政奉還で静岡に行き、1873 (明治6) 年に東京に戻って麹町で下駄屋を開きました。そこで類焼に遭って、神保町で1881 (明治



▲1907 (明治40) 年頃の東京堂書店。東京堂は1891 (明治24) 年に小売業のほか、書籍の取次業と出版業も展開した。



▲1881（明治14）年、古書店として誕生した三省堂書店。創業者一族の亀井家は駿河台に屋敷があった。

14）年に古本屋を開業するとともに、出版事業も始めたのです。

ちなみに、三省堂書店が関東大震災後、新店舗で蘇ったのが1929（昭和4）年。このとき打ち出したコンセプトは「学生のデパート」でした。書籍のほか、文具・学生服・化粧品・雑貨などを取り扱い、プレイガイドも設置していました。

この時代の主な出版社の誕生を見てみると、1877（明治10）年、有斐閣創業。1887（明治20）年、博文館（東京堂）創業。1896（明治29）年、新声社（今の新潮社）創業。1897（明治30）年、実業之日本社創業。1909（明治42）年、講談



◀時代は進んで1932（昭和7）年頃の古書店街。本を物色する学生で溢れかえっている。

社創業。1913（大正2）年、岩波書店、ダイヤモンド社創業。1914（大正3）年、平凡社創業。1922（大正11）年、小学館創業。1923（大正12）年、文藝春秋創業。1926（大正15）年、集英社創業。1941（昭和16）年、二見

書房創業。1945（昭和20）年、角川書店創業。1948（昭和23）年、中央経済社創業。1959（昭和34）年、日本文芸社創業となり、太字の出版社は今でも千代田区内に会社があります。

こうして名実ともに「本の街」としての名声を築き上げてきた神保町ですが、江戸時代、出版社や書店が立ち並ぶ中心街は日本橋界限でした。

歌麿や写楽の出版プロデューサーとして名高い蔦屋重三郎が進出したのも、日本橋の通油町。神保町は江戸の出版文化の発展によってできた街ではなく、大学や専門学校、学生や教師という新たな読者層に支えられて誕生した街なのです。

と同時に、「思想の変革・技術の変革・流通の変革」という時代の波に乗って発展をしていくのです。

明治・大正と2度の大火に見舞われた、その後の復活劇！

「火事と喧嘩は江戸の華」と言われますが、「学生に次いで神田の名物は火事であろう」と書いたのは、文豪・谷崎潤一郎の弟で英文学者の谷崎精二（「神保町辺」／『大東京繁昌記 山手篇』1928〈昭和3年〉刊所収）です。神保町も1880（明治13）年、1881（明治14）年のほか、たびたび大火に見舞われました。

1892（明治25）年4月9日夜半、「明治の神田大火」が発生。『東京古書店組合五十年史』によれば、「火元は猿楽町で、神保町から錦町にまで燃え拡がって、富山房、東京堂などが焼失した」とあります。

また、1913（大正2）年2月20日夜半に、「大正の神田大火」が発生し、その被害は「明治の大火」

を上回る甚大なものでした。それは一夜にして三崎町から神保町、猿楽町一带を焼き尽くすものでした。

「三崎町から火を發し猿楽町、裏神保町、表神保町を一なめにして、錦町まで、約五千戸を焼きつくし」（野田宇太郎『東京文学散歩』、「一夜のうちに神田古書店街を焼野原に変えたのである」（『東京古書店組合五十年史』）。

こうした数々の大火をくぐり抜け、1914（大正3）年からは第一次世界大戦の好景気にも乗って「出版の興隆とともに、業界は榮えに榮えた」と『東京古書店組合五十年史』には記されています。

しかし、1923（大正12）年9月1日午前11時58分に起こった、マグニチュード7・9の関東大震災で神保町一带は焼け野原と化し、大正初期の近代建築の代表だった東京堂本店も焼失しました。死者・行方不



▲▼1913（大正2）年の「神田大火」と、それを報じる東京朝日新聞。



明者は、じつに10万5千人ともいわれていきます。

作家の田山花袋は、「突然の家鳴り振動の物凄さと、周りの柵の倒れる音に、事務室にいた者は、とっさに机の下に頭を突っ込んでいた」（『東京堂百年の歩み』）と記し、翌年発表した『東京震災記』では、九段坂上から見た神保町方面の風景を次のように描写しています。

「私は一面に焼野原で、目の及ぶ限り殆ど灰燼になっていないところのないのを見た。ニコライ堂の半ば焼け落ちていゝのも、駿河台から神保町にかけて処々に建物の残骸が聳えているのも、神田明神の焼けたあとの台地のガランとしているのも、何も彼もその火災のいかに烈しかったかを語り尽くして余りあるのを見た」。そして、「全く廃墟だ！ 都会の廃墟だ！」と花袋は嘆くのです。大震災でそのほとんどが廃墟とな

▶ 右側の高い塔の建物は文房堂。左奥には靖国神社の大鳥居が見える。



を受けた神保町の街並み



◀ 神田駿河台交差点付近の惨状。

▼神保町で市電が無残に焼け落ちている。



関東大震災で壊滅的な被害

▼小川町交差点付近からニコライ堂を望む。



った神保町。しかしこの街は、そこから驚異的な力で立ち上がり、『東京古書店組合五十年史』にも、罹災した神田の古書店の「ほとんどが同年内にバラック建の飯店舗で早々に営業を開始していた」とあります。

そして、大学図書館や公共図書館の蔵書が焼失してしまったため緊急の需要が増えて、古書業者は関西方面へ出向いて買い入れを行い、その需要に応えていったのです。

路面電車が開通したことで、各地から神保町へ人が来る

神保町の発展は、路面電車網の整備が大きい要因で、最盛期には神保町交差点に7系統の市電（都電）が走りました。最初に敷かれた軌道は、小川町から九段上に至る現在

の靖国通り上で、1904（明治37）年12月。また、現在の白山通りを最初に電車が走ったのは神保町（

春日町間で、1908（明治41）年4月のことでした。震災による帝都復興計画では、九



▲1903（明治36）年、東京市街鉄道が開通。イメージの絵葉書は「（帝都名所）神田区神保町通り」（上）と「（帝都名所）九段坂及び神田方面遠望」（下）。

▶日本観光自動車協会発行「東京市内遊覧」地図の右には九段坂と御茶ノ水に挟まれて、しっかりと「神田書店街」がある。



◀今はなき2軒連なる「三鈴堂眼鏡店」と「本と街の案内所」の看板建築。右は、上から見るとこんな感じ。

▶世界一の古書店街には東京古書会館がある。ここでは曜日ごとにジャンル別の古書の売買が行われ、「東京古典会」「明治古典会」のように独特の名前がついている。写真は昔の東京古書会館。



東京都古書籍商協同組合・本部（昭和42年竣工）



写真上・東京古書会館本部二階広間（昭和42年～2000年）
写真下・旧東京古書会館本部の外観

段坂の勾配が緩やかになり、拡幅された靖国通りと接続されると、神保町は以前にも増して交通の要衝となりました。

この電車網の発展と靖国通りができたことで物流が整備・拡大され、書店街復活の大きな要因になりました。それに伴って飲食店や商店も活気づいて、街に賑わいが戻ってきたのです。

当時の『東京市内遊覧』（前頁）のパンフレットには「神田書店街」の文字が躍り、観光地としても注目されていたことがわかります。また、商店街の中心地が南神保町から駿河台下へ神保町交差点にかけての靖国通り沿いに移り、現在の古書店が立ち並ぶきっかけとなったのです。

また、この時期に建てられたのが、建物の表面にタイルや銅板、モルタルなどで意匠を凝らした「看板建築」です。今では取り壊されてビ

ル化し、現存するのは僅かになりましたが実に趣のある建物です。

カフェー街「新天地」には、ネオンとジャズが溢れていた

時代は昭和に入り、神保町で急速に発展していったのがカフェー街（喫茶店街）でした。喫茶店といっても、当時のカフェーは純喫茶ではなく、アルコールもあり、女給の色気売りにする店もありました。それが学生街に建ち始めたのです。

当時の東京を考証した民俗学研究者で、建築学や意匠などに造詣が深い今和次郎は、『新版大東京案内』（1929〈昭和4〉年）のなかで「神田の神保町近くに、カフェー街の出現したのは、注目すべき現象である」としたうえで、次のように記しています。

「バーと喫茶店を兼ねた瀟洒なカフェーが、裏通り一面に撒き散らさ

れてゐるのである」「夜など大学生が、遊廓をひやかすようにしてこのカフェー街をうろうろしている有様……」と嘆いてもいます。実際に、不良学生のためり場、犯罪の温床となったこともあり、警察も警戒し、当時の新聞でも次のように酷評されていました。

「不良少年、少女のばつこてうりようと云へば、その背景に必ず何々カフェーの名が出で、警察や司法当局者等は学生の墮落や犯罪がカフェーを中心として発生されることを十二分に認めてゐる。明大、中大、専修其他を控へた神田には、いま九百二十数軒のカフェーがある。」『東京朝日新聞』（1925年4月29日）

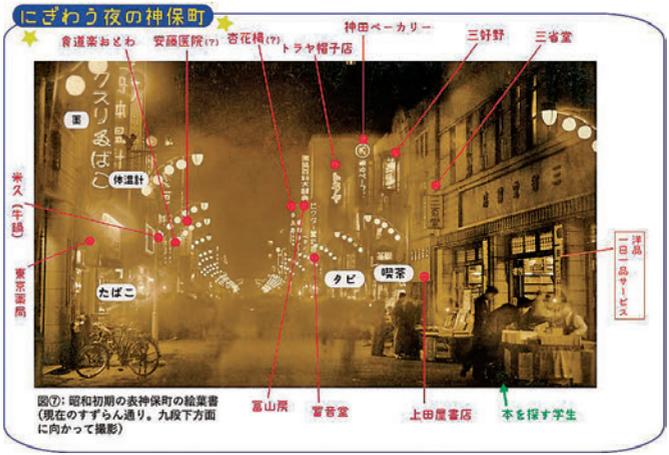
このカフェー街は靖国通りの南側にも北側にも点在していましたが、最も大規模に展開していたのは、すずらん通りの南側にあった「新天地」と呼ばれるエリアでした。



▶1932（昭和7）年頃、諦めかしいネオンが眩しい新天地のカフェー街の様子。

『大東京うまいもの食べある記』（白木正光編／1933（昭和8）年版）には、次のように記述されています。

「東京堂側のがね寿司の横丁を曲がると、忽ち展開するネオンサイ



とジャズの狂騒曲を、初めて見聞する人々は、必ずびっくりするであります。全く何時のまにかうも激しい変わり方をしたものか、軒並の全部が喫茶店、カフェーで、そして例のネオンとジャズの満艦飾街を現

東京朝日新聞 25年4月29日

カフエー街を酷評する紙面（東京朝日新聞）1925年4月29日

カフエーから生れる
近頃の學生犯罪
最も安価な酒と女の供給に
今や全く不良團の巢

女給を中心に
恐るべき連絡を
カフエーの内部

最後の干支も新米代に
カフエーに於ける学生犯罪の増加
カフエーに於ける学生犯罪の増加
カフエーに於ける学生犯罪の増加

帝大生
入代つ
窓越

藤の若葉（種物園で）

出してゐるのです」

谷崎精二の「神保町辺」（10頁参照）には、「銀座のカフェーへは紳士でないとはいり難い様に、神田のカフェーでは学生でないと言身が狭い」と記しています。

「新天地」に限らず、神保町周辺にあったカフェーが学生（＝モダンボーイ）を対象にした店で、前出の『大東京うまいもの食べある記』には、女給さんも「ずぶの素人臭い女」や「断髪の少女」が多かったとあります。その彼女たちが「コッテリと塗って、よく明治の校歌の斉唱です」とは、なんとも楽しげな光景ではありませんか。それが、今も学生街風の喫茶店が多く残るこの街の特徴なのかもしれません。

中国人留學生が闊歩した
チャイナタウン神保町

「食」もまた、神保町の学生街を

前提に発展していききました。

谷崎精二が著書「神保町辺」で、「神保町付近にはカフェーやレストランが沢山軒を並べているが、どれも学生向の安直な物ばかりである」と苦言を呈したあとに取り上げたのが、今も神保町のランドマークとも

いふべき洋食店ビヤホール「ランチヨン」です。曰く、「こゝでは昔から給仕人に女を置かないでさっぱりしていい」とあります。ランチヨンは猥雑なカフェーとは一線を画した、当時から一般人や著名人が訪れる人気の洋食店でした。

▼周恩来の生まれ故郷・江浙地方の家庭料理が味わえる「漢陽樓」は、孫文も常連だった。



また、神保町の「食」に欠かせないのが中国料理店です。日清戦争後の1895（明治28）年に来日した中国人留学生たちが、日本の大学で学ぶために、大学が多く集まるここ神保町界隈に住み始めるのは自明の理でした。

留学生向けの日本語学校もあったため、「中国人留学生の街」という側面を持ち、彼らの胃袋を満たすために故郷の味を提供する中国料理店が次々にオープンしたのです。

そして、1899（明治32）年、神田今川小路に留学生相手の郷土料



▲中国人留学生に日本語を教える東亜高等予備学校の跡地・愛全公園にある周恩来の碑。

理店を始めた「維新號」を皮切りに、1906（明治39）年に「揚子江菜館」が、1911（明治44）年に「漢陽楼」が開店するなど、多くの中国料理店が集まりました。なかでも「漢陽楼」は、1917（大正6）年に留学生として来日した周恩来の伝記的自伝『周恩来 十九歳の東京日記』（小学館文庫）にも登場します。「中国革命の父」と呼ばれた孫文も、漢陽楼の常連でした。

ちなみに中国最高級の食材・上海蟹で有名な「新世界菜館」は意外に新しく、第二次世界大戦後もまもなくの1946（昭和21）年創業です。

空襲にも見舞われるも、

奇跡的に焼失を免れた古書店街

昭和の初め、1929（昭和4）年に始まった世界恐慌は、経済問題だけにとどまらず、第二次世界大戦のきっかけをつくったともいえる大

事件でした。

「(昭和)五年頃からの不景気風は神田古書店街にも容赦なく吹き荒れた」「暗殺事件の頻発、マルキシズムの弾圧、七年の満州国独立、五・一五事件……」と『東京古書店組合五十年史』にあります。迫りくる戦争の影が、本の街に影響しないわけはありません。

途中、やや景気が回復した時期もありましたが、1941(昭和16)年12月、太平洋戦争が始まると物資の調達が難しくなり、物価上昇を抑えるために政府の指示であらゆる物に公定価格ができました。

古書も例外ではなく、商工省から通達があり、公定価格が決められ、警視庁からも市場の名称を「交換会」に変えられたりする干渉がありました。古書組合員も勤労働員に駆り出されたりして、「商売としては最低の路線をたどった」と『五十年

史』は伝えています。

やがて東京は大量襲に見舞われ、神保町周辺にも被害が及ぶようになります。

1945(昭和20)年2月15日、3月10日、4月15日、5月24、25日と神保町周辺への空襲がありました。主要な場所だけは、奇跡的に焼失を免れたのです。

文芸評論家の野田宇太郎は、「東京に神保町があるといふこと」(『日本古書通信』第388号

／1976年8月)で、セルゲイ・エリセーフというロシア人学者の進言によって、神保町が意図的に空襲の標的から外されたという説を提示

▼1937(昭和12)年には日中戦争が勃発し、すずらん通りの入口には「連合福引大売出し」とともに、「祝南京陥落」と書いたプレートが掲げられた。



しています。

「……それにしてもあの苛烈な戦火に神保町の古書店街だけは焼けのこつて現在も盛業をつぎけてゐるといふことは、果して偶然だけのこと



▲学生街にも軍靴の音が忍び寄り、明治大学でも学徒壮行会が開かれた。

活かせ古本、非常時日本 古本を買って国策、売って得策

だらうか。
神奈川県
の座間とい
ふところ
に、エミ
ル・ガスバ

ルドンといふフランスの東洋学者が
住んで居られて、しづかに研究と著
述に日を送られてゐる。小さな珈琲
店でたのしい会談のひとつきを過し
た話のついでに、わたくしは拙著を
差し上げたりしたエリセーフさんの



▲戦時下は総動員態勢でも物資も供給させられ、各地で愛国婦人会等が活動した（写真はイメージ）。



▲エリセーフの進言によって、戦禍を免れたといわれている神保町古書店街（赤色が焼失した地域）。

ことを話題にした。

エリセーフさんの名が出たときガスバルドンさんは大切なことを思ひ出したといふやうに、静かにいはれた。『神保町がアメリカ軍の爆撃目標から外されたのも、エリセーフさんの進言がマックアーサー將軍にとりあげられたからだと聞きました。エリセーフさんから直接聞いたものではありませんが、パリの学者間でもつばらの噂でした』

また、経済学者の大塚金之助は、『終戦直後の東京の古本屋街〜一九四五（昭和二〇）年〜というエッセイで、終戦直後の神保町界隈を次のように記しました。

「この古本屋街のうち、駿河台下から神保町交差点

までの北側は戦災で全焼し、神保町交差点から水道橋へ向う両側の古本屋も一軒のこらず焼けていて、のこったのは、駿河台下から神保町交差点までの南側と、神保町交差点から九段下までの南北両側とである。そのうちのあるものは疎開し、あるものは閉店していて、約半分ぐらいが営業している」

戦災は免れたものの、本の品薄状態は続きます。しかし終戦によって新制大学の本の需要は高まり、また、旧家から貴重な本が放出されて、神保町は再び不死鳥のように蘇ります。主要な部分があるとかが戦災を免れた古書店街——昭和初期の姿・形を今も残しているのは、空襲を免れた奇跡的な幸運と、人々の本に対する愛情の賜物といえるかもしれません。終戦後の経済発展とともに本の街・神保町も活況を呈し、平成時代へと歩みを進めていくのです。

いかにして、本の街はできたのか

なるほど神保町！

文化・エンタメよもやま話

【第2部】

夏目漱石が作品中に描いた
神保町の「原風景」

神田猿楽町のお茶の水小学校（旧・錦華小学校）の一角に『明治十一年 夏目漱石 錦華に学ぶ』と書かれた石碑があります。夏目漱石（本名／塩原金之助）は錦華小学校に学び、駿河台の成立学舎で英語を学んだあと、表神保町の東京帝国大学予備門に入学して猿楽町に下宿し、学校に通っていました。作品中でも、街の様子を描いています。『それから』では、「裏神保町の宿

屋」が登場します。銀行マンとして関西に赴任したものの、リストラされて東京に舞い戻ってきた主人公・代助の友人。そのときに仮宿したのが裏神保町となっています。

『門』では、主人公・宗助が日曜日、気晴らしに神保町を散歩する場面で書店が登場します。

「宗助は駿河台下で電車を降りた。降りるとすぐ右側の窓硝子の中に美しく並べてある洋書に眼が付いた。宗助はしばらくその前に立って、赤や青や縞や模様の上に、鮮かに叩き込んだある金文字を眺めた」

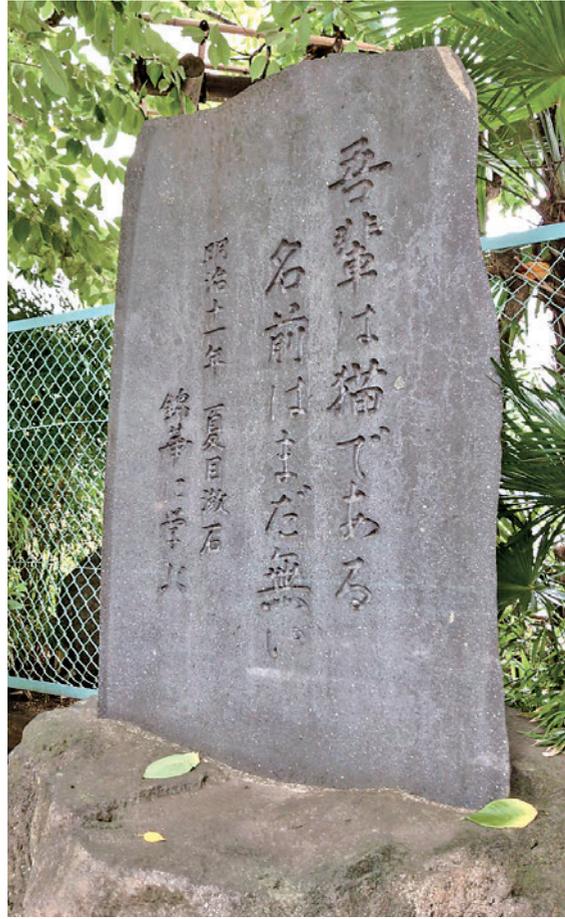
『こころ』では、先生が友人Kと女性をめぐる決定的なやりとりのあとで逃げるように外出する場面。

「私は猿楽町から神保町の通りへ出て、小川町の方へ曲りました。私がか此界隈を歩くのは、いつも古本屋をひやかすのが目的でしたが、其日は手摺れのした書物などを眺める気が、何うしても起らないのです」

漱石は1914（大正3）年、岩波書店から『こころ』を出版し、創業者・岩波茂雄の一高時代の学友・藤村操が『巖頭之感』を残して日光・華厳の滝に投身自殺したとき



▲靖国通りと白山通りの2大幹線道路が交差する神保町。

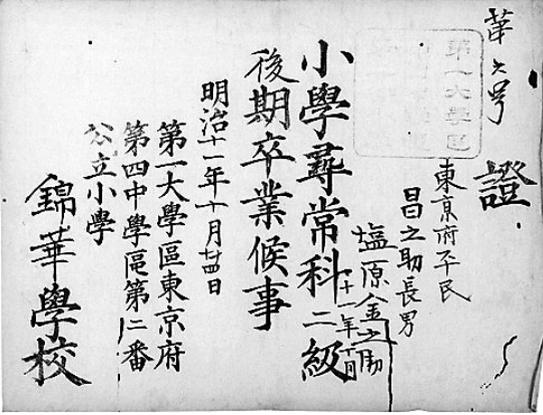


▶お茶の水小学校(旧錦華小学校)には夏目漱石の『吾輩は猫である』の石碑が立っています。

に、岩波自身が受けた衝撃をモチーフとして、いるようです。

これ以後、岩波書店は漱石作品の出版を手がけ、1916(大正5)年12月に漱石が亡くなったあと、『漱石全集』を刊行して、経営を軌道に乗せていきます。

▼貴重な卒業証書。



芥川が谷崎を誘って、カフェーで暇つぶし!?

世界最大の書店街である神保町には、夏目漱石のほかにも多くの作家が住み、また訪れました。森鷗外の『雁』や『洪江抽斎』、二葉亭四迷の『浮雲』など、文学作品にも神保町は頻繁に登場します。

24歳の若さで亡くなった樋口一葉は1888(明治21)年の秋、高輪から表神保町に引越し、神田淡路町に転居するまで同所で暮らし、『十三夜』にはその当時のことを描いています。

1886(明治19)年に日本橋蠣殻町に生まれた谷崎潤一郎も、東京帝国大学生だった頃は、一家で神保町に住んでいました。その谷崎と一緒に神田の古書店街をひやかしながら、裏神保町のカフェーで暇つぶし(!?)をしたのが芥川龍之介です。

「僕は或初夏の午後、谷崎氏と神田をひやかしに出かけた。谷崎氏はその日も黒背広に赤い襟飾りを結んでゐた。僕はこの壮大なる襟飾りに、象徴せられたるロマンティズムを感じた。尤もこれは僕ばかりではない。往來の人も男女を問はず、僕と同じ印象を受けたのであらう。すれ違ふ度に谷崎氏の顔をじろじろ見ないものは一人もなかつた」(岩波書店刊『芥川龍之介全集』第十卷「谷崎潤一郎氏」より)

「その内に僕等は裏神保町の或カツフエへ腰を下した。何でも喉の渴いたため、炭酸水か何か飲みにはひつたのである。僕は飲みものを注文した後も、つらつら谷崎氏の喉もとに燃えたロマンティズムの烽火を眺めてゐた」(同前)

すでにおわかりのように、「裏神保町」とは現在のすずらん通りと靖国通りに挟まれた一角で、「表神保

町」「裏神保町」とも、明治から大正期に書かれた小説や随筆によく登場します。すでにその頃はカフェーがたくさんあつて、古書店街を散策中に多くの作家たちが立ち寄つていたのでしよう。

芥川龍之介は神保町のカフェーを舞台にして、若い女給さんを主人公にした短編も書いています。

「神田神保町辺のあるカツフエに、お君きみさんと云う女給仕がいる。年は十五とか十六とか云うが、見た所はもつと大人らしい。何しろ色が

白くつて、眼が涼しいから、鼻の先が少し上を向いていても、とにかく一通りの美人である。それが髪をまん中から割つて、忘れな草の簪をさして、白いエプロンをかけて、自動ピアノ(※原文ママ/穴をあけた紙に記録された楽譜を読み取つて自動的にピアノ演奏ができる機械/編集部注)の前に立っている所は、とん

と竹久夢二君の画中の人物が抜け出したようだ」(ちくま文庫『芥川龍之介全集3』「葱」より)

カフェーの女給仕も、カフェーに集う物書きや学生たちの話題、彼らとのさりげない会話から、文学や音楽、美術などの芸術的な関心を呼び起こしたに違いありません。こんなところからも、古き良き時代の神保町の様子が浮かび上がってきます。

また、司馬遼太郎は『街道をゆく 36 本所深川散歩・神田界隈』の中で、次のように書いています。

「同じ神田界隈でも、自然地理学的にみて、高低がある。

明治大学やニコライ堂などのある駿河台が丘であるのに対し、界隈の南端はひくい。

低所からふれる。

いまの一橋講堂や共立女子大、あるいは学士会館があるあたりである。



数多くの作家たちが愛した神保町。好きな作家の本を、お気に入りの喫茶店で読むのも至極のひと時だ。

ギャラリー喫茶店 古瀬戸



交叉点に立ってみると、このあたりは沼地ではなかったかという気がしてくる。帰宅してしらべてみたところ、どうやら家康の関東入国のころはそのようだったらしい。沼といっても、まわりの地形からみて、ごく浅い遊水池程度だったかとおもえる」

ほかに、漱石と大学で同級になり、猿楽町に下宿していた正岡子規、ドイツ語学校に通うため現・西神田二丁目にあった西周宅に下宿していた森鷗外、漱石や子規よりも5歳年下の樋口一葉は、表神保町や神田淡路町で暮らしました。寺田寅彦、永井荷風、斎藤茂吉なども神保町と所縁があり、小説や随筆で描写しています。

また、現代の作家でも、たとえば『まれにみるバカ』がベストセラーになったエッセイストの勢古浩爾（明大卒）は、『定年後のリアル』

（草思社文庫）でこう書いています。

「もう朝早く起きて勤めに出ることもない、好きな時間に起きて、気の向いたことをすればよい。もう贅沢は言わない。今日の昼は、久しぶりにお茶の水に出て、キッチン南海のカツカレーでも食べるか、だけでいい」

逢坂剛、鹿島茂、森まゆみなど、現在も足繁く神保町に通い詰めて、『神保町沼』を抜けられない作家・文人はたくさんいます。突き詰めれば、神保町という街は「文学」とは切っても切れない恋仲なのではないでしょうか。

映画館も花盛り、 文化の香り高き神保町

意外に知られていませんが、神保町はかつては映画の街でした。映画は当時「活動写真」と呼ばれていて、東京で最初に公開されたのは1

897（明治30）年3月、神田錦町三丁目にあった「錦輝館きんきかん」だといわれています。錦輝館は1891（明治24）年に建てられた集会や演説会のための貸席で、場所は現在の神田税務署付近にありました。

上映された活動写真について、永井龍男（明治37年、猿楽町生まれ）の自伝小説『石版東京図絵』には、「外国の風景とか、外国婦人のダンスとかいう、ごく短い実写フィルムが、ただ人間が動き汽車が走って見えるということだけで、ものすごい反響」を呼び、「高額な入場料にもかかわらず、昼夜二回の興行を、数日間日延べするほどの大当たりをとった」と書いています。

また、永井荷風『溼東綺譚』の冒頭にも錦輝館が登場します。

「明治三十年頃でもあろう。神田錦町にあった貸席錦輝館で、サンフランシスコ市街の光景を写したもの

▼靖国通りにあった「神田日活館」（現在は石井スポーツがある）。

▲さくら通りにあった「東洋キネマ」。



を見たことがあった。活動写真という言葉のできたのも恐らくはその時分からであろう」

動く風景を上映しただけでも大入りだったというのですから、映画がいかに物珍しかったかがわかります。残念ながら錦輝館は1918

(大正7)年に失火で焼失しますが、その後、常設の活動写真館が相次いで建てられることになりました。

1941(昭和16)年の地図では、神保町二丁目に「神田日活館」、二丁目に「東洋キネマ」「銀映座」、駿河台下小川町三丁目には「南明座」「大都座」があり、昭和30年代になっても、神田日活館、東洋キネマ、銀映座、南明座は健在でした。宮沢賢治が神田日活館で映画を見たことを『神田の夜』という詩に残しています。しかしそのすべてが、今はありません。

そのなかで最後まで残っていたのが東洋キネマで、1992(平成4)年までその姿をとどめていまし

大正十一年新春より生れたる活劇的映画は必ずヤアン諸君の猛烈的歓迎を博するや必せり

見!!! 見!!!

映畫 大正活映切
 説明者 徳川夢聲
 藤浪無鳴
 オークス 波多野鏗次郎
 ドラマ 総ては近代世界の権威到底他館の企て及ぶる所なり
 神田神保町通り

東洋キネマ

(社務女給至急要請)

▲▶東洋キネマの広告（大正期：「東京朝日新聞」掲載）。

東洋キネマ

今日日本唯一の活劇大映

カレン

活動の女王
 ハムレット
 足んぶる
 店頭生

ユージエス
 オグネイト

東洋キネマ

た。東洋キネマの開業は1922（大正11）年まで遡り、関東大震災で壊れたあと、1928（昭和3）年に再建された建物が平成まで残っていたわけです。映画館としては昭和40年代後半に使命を終え、長らく倉庫として使われていました。

また、現在の専大前交差点の北側にあった「銀映座」は、1933（昭和8）年築の震災復興名建築として知られましたが、1964（昭和39）年の東京オリンピックの頃にはなくなり、現在は新しいビルが建っています。

1929（昭和4）年に建てられた「神田日活館」は、洋食のランチオンやスマトラカレー共栄堂の並びにあった映画館でした。残念ながらこの映画館は、1969（昭和44）年に閉

館となります。

長く、映画の街」として親しまれた神保町ですが、今その流れは、1974（昭和49）年から世界の埋もれた名作映画の発掘上映を行っている「岩波ホール」や、昭和の懐かしい映画を中心に上映している小学館直営の「神保町シアター」（吉本興業運営のお笑い劇場「神保町花月」併設）などに引き継がれています。

画一化していく学生街 ターミナル駅街と変わらない!?

さて昭和の高度成長期、学生街にも微妙な変化が起こっていました。

1965（昭和40）年刊の東京ガイド誌『世界のシヨ』（新風社）には「近頃の神田」と題して、学生数や新校舎の増改築がめざましいなか、「表通りからちよつと横にはいれば、かならずマージャン屋の看板が一つや二つは目につく」「そのか

わり、神保町の古本屋街で、なけなしの金をはたいて参考書を買うような学生はめっきりへったようである」と綴られています。



▶ 神保町やお茶の水
 境界では、洒落た喫茶店が数多く存在し、
 明大の卒業アルバムでも紙面を割いた。

▼1969 (昭和44) 年頃、駿河台下交差点付近のデモ隊。敷石を剥がして投石に使った。



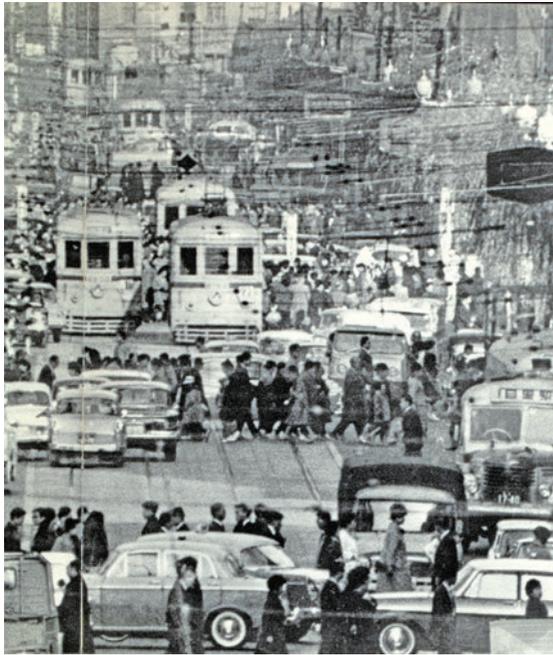
戦前と異なるのは、「学校と学生の街だけに夜は、どの商店も早く店をしまえてしまい、歓楽はよその街にゆずって

いる」とあることです。戦前の「新天地」が神保町に再建されることはなく、その代わり、ジャズやクラシックを聴かせる音楽喫茶や今も残る「さぼうる」「ラドリオ」「ミロンガ」「神田伯刺西爾」「茶房きゃんどる」



▲震災後の「看板建築」が立ち並ぶ1966（昭和41）年頃の靖国通り古書店街。

◀駿河台交差点。高度成長期のモータリゼーションの波が特徴的だ。



といった「純喫茶」文化が花開きました。

また、神保町の歴史で欠くことのできない出来事が大学紛争です。1968（昭和43）年、折からのベトナム戦争の泥沼化を受け

て、世界的に本格化した学生運動の波が日本にも押し寄せました。学費

値上げに端を発した「日大闘争」が激化し、夏には全学ストに突入。連日のデモが書店街でも繰り広げられました。これを「神田カルチェ・ラタン闘争」と呼びますが、翌1969（昭和44）年1月の東大安田講堂

事件の際も、駿河台周辺は騒然となり、書店街も大きな被害がもたらされたことが伝えられています。

また、昭和30年代から40年代にかけては慢性的な交通渋滞に悩まされていたので、1972（昭和47）年に

靖国通りの岩本町から九段下までの区間上に、高架道路を建設する話が持ち上がりました。

しかし、地元の商店や事務所は、街の景観を損ない、街を沈下させる恐れのある高架道路に一致団結して反対の声を上げました。その結果、高架道路建設計画は中止され、神保町は今の街並みが保全される本の地下鉄が通る交通の要になったのです。

昭和から平成の30年を経て、 令和の時代も、「やるぞ！ 神保町！」

さて、時代は一気にタイムスリッ
プします。1986（昭和61）年から1991（平成3）年にかけてのバブル景気は、神保町の地価を異常に引き上げました。しかし神保町は、皆で知恵を出し合って、この難局を乗り越えました。

デジタル情報化時代になり、書物のあり方も大きく変貌を遂げていま

すが、その中でも神保町の古書店は、「古書交換」という世界でも例を見ない市場を通して「古書」という情報を共有し、世界に目を向けて発信しています。

また、伝統ある新刊書店も複合施設化して多様な客層を取り込む新機軸を打ち出したり、出版界では神保町に出版クラブビルができて、それぞれの企業体が知恵を出して活性化を図っています。神保町にある多くの大学も「社会連携」という部署をつくって神保町の街のあり方に、共に知恵を出し合っています。

昭和から平成、そして令和の時代になり、ますます変貌を遂げる「本の街」神保町ですが、街の力を結集して古き良き時代の風情と人情を失うことなく、これからも発展し続けていくことでしょう。

「やるぞ！ 神保町！」

「おもしろいぞ！ 神保町！」



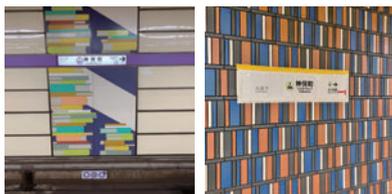
▲共立女子大学・明治大学・東京大学・日本大学・東京都市大学・法政大学の、「神保町の街づくり」の研究成果をまとめた冊子。古書店街の将来像を考えるシンポジウムも行われた。

【参考文献・写真提供】（順不同）

『神保町が好きだ！ Vol. 5～Vol. 8、Vol.11』、『飯澤文夫書誌選集Ⅱ 本の街・神保町で過して』飯澤文夫（元明治大学図書館勤務、明治大学史資料センター研究調査員）、『神保町—近代の歩み』長谷川 怜（皇學館大学文学部 国史学科助教授）、神奈川近代文学館、東京大学出版会、明治大学史資料センター、神田古書店連盟、千代田区教育委員会、岩波書店、三省堂書店、東京堂、漢陽楼、レオ マカラズヤ、『神保町公式ガイド Vol. 3』（風讀社「ナビブラ神保町」編集部+壬生 篤）

【編集協力】

飯澤文夫、大久保徹也、小藤田正夫、佐藤善孝、野上 暁、長谷川 怜、八木壯一



本をモチーフにした半蔵門線と都営新宿線の壁画

神保町が好きだ！

神保町が好きだ！ 第13号 2019年10月11日発行

発行人：八木壯一（八木書店）

発行所：本の街・神保町を元気にする会

〒101-0051

東京都千代田区神田神保町1-1 三省堂書店神保町本店内

電話 03-3295-1881

編集：株式会社風讀社「ナビブラ神保町」編集部（校條 真）

印刷：モリモト印刷株式会社